

教師の危機とその克服

Teacher's Crises and Passing through them

柿田 恵子*・渡辺実由紀**・根本 橋夫***

Keiko KAKITA, Miyuki WATANABE and Kitsuo NEMOTO

問題と目的

長い教師生活を続けていく間には、教職の継続を困難にする危機ともよべる出来事や時期があるであろう。これらのなかには、出産や子育てなど、いわば教師の人生の発達段階から必然的に突き当たらざるを得ない困難も存在するであろう。また、教育を取り巻く状況など外的要因に誘発される困難もあるだろう。とりわけ、近年困難な幾多の問題が生じているように思われる。たとえば、登校拒否、いじめ、子どもの変質、学校の管理主義化等々である。こうした困難をくぐり抜けて長い教師生活を送ってきた教師から、危機との出会いおよびその危機をいかに乗り越えてきたかを学ぶことは、後進の教師および教師教育にとり有効であると思われる。

教師が体験する困難については、教師の不満や悩みあるいは疲労として、これまでに幾つかの研究がなされてきた。こうした一連の研究の中で、教師の体験する困難を教師ストレスとしてとりあげたり、燃え尽き症候群としてとりあげた研究はよく知られるところである。それぞれ貴重な知見を提出しているが、これらの研究は、教師がいかにしてこうした悩みや困難を克服しようとしているかを十分明らかにしていない。

本研究は、教師が出会う困難を教職継続の危機ととらえ、その内容と克服の仕方を明らかにしようとするものである。具体的には以下の点を明らかにすることを目指す。

- ① 長い教師歴の中で出会う悩みや困難（危機）の内容
- ② 危機の内容と時期および経験年数との関わり
- ③ 危機の乗り越え方

以上に加え、補足的に次の事項をも検討する。・教職志望動機と危機およびその乗り越え方との関係・教師の情熱を失わせる現在の教育を巡る状況・教師を継続させる魅力

資料の収集は、教職経験の長い教師に面接し、回想を求める方法による。これにより、教師自身がいかなる体験を危機ととらえ、それをいかにして乗り越えてきたと意識しているかをとらえることができる。さらに必要な場合には、明確化するための補足的な質問を隨時加えることができるという利点を持つ。

方 法

調査対象：研究の主旨を理解し、協力を約束してくれた小学校教師32名（男性教師9名、女性教師23名）である。教職経験年数は15年から41年にわたり、平均25.4年である。内訳は、15年以上20年未満が8名、20年以上30年未満が15名、30年以上が9名（前年度停年退職者2名を含む）である。また、校長・教頭経験者は8名（男性教師5名、女性教師3名）であり、未婚

* 佐倉市立真野台小学校 ** 日本通運 *** 千葉大学

者は女性教師4名である。

調査時期：1989年4月下旬から10月下旬である。

調査方法：被調査者に個別に面接した。面接者は第1, 第2著者である。大多数の面接は一人で行ったが、最初の6名の面接は2名で行うことにより、面接者間の差異を少なくすることに努めた。面接時間は各教師1時間ほどである。面接は経歴年表への記入から始め、その後に用意した質問に回答を求めるという形式で行った。会話のすべてはテープレコーダーに録音され、分析のために逐語録が作成された。

調査内容：(1) 経歴年表への記入 被面接者が過去を振りかえることを容易にすることおよび分析のための資料を得る目的で実施した。記入内容は、学校関係の出来事、私生活での出来事および教育への情熱度の自己評定である。学校関係の出来事では勤務校と役職およびその他の大きな出来事を、私生活の出来事では結婚、出産、病気その他の大きな出来事を、年次を表す数値のみが記された直線の下に記入してもらった。情熱度の自己評定は、同様の年次を示す直線上に、「とても情熱的」から「とても情熱的でない」までの7段階で回答を求めた。

(2) 質問への回答 以下の質問に対して口頭で回答を求めた。①教職を選んだ動機。②教員生活を振りかえって、「やめたい」ないし「辛い」と思ったこと。③それをどのようにして乗り切ってきたか。④教職において情熱をかきたたせるもの、失わせるもの。⑤その他（子供や親に接して思うこと、教師を目指すものへのアドバイスなど）。

結 果

1 教職に就いた動機

教職に就いた動機をたずねた質問への回答から、動機について主要な5つのタイプがみられた。

① いつとはなしの夢の実現として

なぜか教師になることが幼いころからの夢であり、迷うことなく夢の実現として教職に就いた場合である。

＜事例 女性 教職歴19年＞ 小学校6年の時にはもう決めていた。特別良い先生に習ったからということではなく、なんとなく自分に向いているような気がしていた。迷いはなく、教師しか考えなかった。

② 家族の影響

家族や親戚に教師がいて、その影響で自然に教職をめざすようになった場合である。

＜事例 女性 教職歴21年＞ 祖父母も父母も教師だった。その影響でいつのまにか教師になりたいと思うようになった。祖母らが同窓会によばれていく姿を見て、教えた子どもといつまでも関わっていける。忘れられない存在になっているんだなと思ったりしたことが、教師を志望させたのだと思う。

③ 恩師の影響

子どもの頃優れた教師に出会い、教職に憧れるようになった。あるいは教師の言葉に影響された。教師の強いすすめがあったなどの場合である。

＜事例 女性 教職歴41年＞ 小学校3年のときの先生がとてもすばらしい先生だった。褒め方が特にうまかった。たとえば、「お手洗いの掃除を誰かやってくれる？」と言われ、私がやったことがあった。先生は、「おりこうね」などの褒め方をしないで、みんなをお手洗いに連れて行って、「このお手洗い、○○ちゃんが掃除してくれたので、お弁当を食べてもいいく

らいきれいだね」などの褒め方をしてくれた。この先生の印象が強く、大きくなったらこういう先生になるぞ、と思った。

＜事例 男性 教師歴20年＞ 高校1年の1学期の成績が50人中33番だった。先生から、「君の力ならこれくらいじゃないか」と言われ、自信を失った。それで2ヶ月くらい登校拒否をした。2学期は48番、3学期は49番だった。このとき、劣等生の悲哀を目一杯味わった。2年になる前に、中学の時の先生に会いに行った。その先生が何気ない調子で「お前は昔からやる気になるとできる子なんだぞ」と言った。この言葉にすごく励まされた。それで、教師になろうかなと思った。底辺の子どもの気持ちがわかる教師になろうと思った。とにかくその言葉で、頑張れた。

④ 特定の出来事が契機となった場合

それ以前はほとんど教職を志望していなかったが、ある出来事をきっかけとして教職を志望するようになったケースである。契機となった出来事としては、教育実習、産休補助教員、日曜学校、教育サークルでの体験などがあげられた。

＜事例 女性 教職歴17年＞ 大学入試に落ちて銀行に勤めた。しかし、兄弟が大学にいっており、このままでは嫌だと、大学を受け直した。教師になる気は全然なかった。子どもは好きではなかった。怖い感じで。しかし、教育実習に行って変わった。子どもをかわいいと感じたから。たとえば、実習中小3の男の子が自分の手をぎゅっと握って、「大きくなったら先生と結婚するんだ」とか、「先生行かないで」と泣きながら駅まで送ってくれた。授業も子どもが集中してくれる。一生懸命やれば通じるんだな、と感じた。指導してくれた先生もいい先生だった。私はこれまで考へるだけで行動が伴わなかったが、「失敗を恐れないで、まずやってみなさい」と、行動を引き出してくれた。

＜事例 男性 教職歴21年＞ お寺の日曜学校に行って遊んでいた。自分が中学、高校になってリーダーをやるようになつた。その時、子ども集団が気持ち良く動いてくれた。一人一人個性が異なつて意外な発展をする。すごいなと思った。小学生や幼稚園の子の顔は柔らかく、恥ずかしいということもなく、一番人間らしい生き方をしていると感じた。それで、教師になろうと決めたのは高校3年の時。

⑤ 消極的な理由

教師を志望していたわけではないが、経済的ないし能力的要因から教員養成学部に入學し、なりゆきのままに教師になった場合などである。

＜事例 女性 教職歴41年＞ 経済的に苦しかったので、授業料がいらない師範学校に入った。教師になりたかったわけではない。父の意志だった。私はむしろ女医にあこがれていた。子どもを愛するとか、いいなと思うようになったのは、職場に入ってから。就職してからは、やりがいのある仕事だなと思うようになった。

＜事例 女性 教職歴39年＞ 大学を卒業した年に父親が亡くなった。それで生活していくために、9月から教職に就いた。お嬢さん学校だったので、大学在学中は就職するという考えはなかった。

2 教員生活における危機

(1) 危機の内容

「教員生活を振り返って、辞めたい、つらいと思ったことがありますか。あつたらいつ、どんな内容であるか話してください。」という質問への回答から、危機の内容を次の6つのカテゴリーに分類することができた。

- ① 自己に起因する危機（これは、新卒時の困難、マンネリ、自信喪失、健康上の悩み、その他と、5つに細分される。）
- ② 児童の特性に起因する危機（特に指導の困難な児童への対処法についての悩みである。いじめと高学年の子ども達の変質についての悩みの2つに細分される。）
- ③ 父母との関係に起因する危機（父母との関係および地域の特性などでの困難が含まれる。）
- ④ 職場の人間関係に起因する危機（同僚や上司との関係および組合での悩み等が含まれる。）
- ⑤ 制度に起因する危機（教育行政、学校管理の方針などに由来する困難である。）
- ⑥ 家庭生活に起因する危機（育児・家事と仕事との板挟みでの悩みなどである。）

Table 1 に、各カテゴリーの出現頻度を示した。以下、典型的な事例を示しながら各カテゴリーの内容を説明する。

Table 1. 危機の出現頻度

	男性教師	女性教師	全 体
自己に起因する危機	8	17	25
児童の特性に起因する危機	3	6	9
父母との関係に起因する危機	3	4	7
職場の人間関係に起因する危機	2	10	12
制度に起因する危機	4	2	6
家庭生活に起因する危機	1	15	16

① 自己に起因する危機

ⓐ 新卒時の困難

経験の未熟さからくる戸惑いや不安。先輩教師と比較して陥る自信喪失。また、教師としての適性への疑惑などが含まれる。

<事例 女性 教職歴20年>

性格的に無理だと感じた。今のように教育実習に来て、担当の先生

から親切に教えてもらうということがなかった。卒業するとすぐに55人のクラスを受け持たされ、てんてこまい。いかにしたら子どもの気持ちがわかるか、どうやって学級をまとめていくか、子どもをどう扱っていいかわからなかった。毎日、毎日、いつ辞めようか、いつ辞めようかと悩んだ。結婚したら、子どもができたら、辞めようと思っていた。

<事例 女性 教職歴18年> 新卒で3年生を担当した。そのなかにいたずらっ子とてんかんの子がいた。てんかんの子は興奮すると見境なく暴れる子だった。そういう子が暴れると手が付けられず、どうしていいかわからなかった。そういう時、先輩の先生が来てさっと静めてしまうと、「自分は先生に向いていないのかな」とか「子どもたちに悪いな」と思ってしまった。「子どもが思うように動かない。」「こんなに自分は子どもをかわいく思っているのに、なんで……」という様なことを、いつも新卒仲間で話していた。「子ども達に申し訳ないので辞めよう」と思ったこともある。

ⓑ マンネリ

ある程度の経験を積んだ後の、空虚感、疲れ、燃え尽き、また、そんな自分を本当にこれでいいのか、と思う疑惑などである。

<事例 男性 教職歴33年> 嫌になって無断で一週間休んだ。嫌なことにぶつかったからではなく、「これでいいのかな」という空しさが、学校、自分、仕事に対してあった。倦怠期かもしれない。学校に行くのが嫌、同僚、子どもの顔を見るのが嫌だった。一種のうつ病かな。

<事例 男性 教職歴21年> 2年くらい同じクラスを持つと、2年目の1学期はマンネリになる。新鮮さがない。目標を持っているときはよいが、だんだん慣れてくると大切なことを見逃してしまい、雑なことばかりやってしまっている。新卒の方がすごい授業をされて、思い

知らされたことがある。自分はなんて授業をしているのか、と感じた。毎日毎日よっぽど自分を厳しく見ていかないと、改革なんてできない。マンネリになったとき、情熱が失われている。初めの5年くらいは無我夢中でやっている。だんだん慣れてくるとちょっとぼっかり、という感じ。だらだらと学校に行っては授業をして、「ああ一日が終わったな」と一日一日の問題意識を持たずに行くという時期があった。楽な方向へ流れる。その時気づかなければならぬのに、明日でも間に合うだろうと後回しにしてしまった時期がある。淡々とやっていた。そのとき子どもへの影響は、教師の姿が子どもに映るから、活発でないとか、するがしこい子どもができる。こっちがさぼるから子どももさぼる。手を抜くと子どもも手を抜く。

④ 自信喪失

何年か経験を積んだ後に感じる自分の指導能力への不満や疑惑などである。

〈事例 男性 教職歴20年〉 20代後半、5年くらいやった後、子どもが好き、若さだけでは空しい自分を感じた。授業がうまくできるか、本当に自分は子どもを見抜く力を持っているか。専門職としての自信がなくなった時期。ベテランの先生の方が授業はうまくできる。新卒時は若いということで子どもはわっと寄ってくる。自分もそれに対して「いい先生なんだな」と思ってしまう。しかし、それだけでは空しいという時期があった。

〈事例 女性 教職歴17年〉 これだけやってきたのに、自分は力がないなと思った。最近。仕事をやっている時、子どもと夢中で遊べなくなってきたことに気づいた時、辞めたいなと思う。子どもと夢中になる部分が少なくなってきていている。疲れている時、若いころは「よし、子ども達が待っているんだ」と思っていたものが、最近では「なんとかなるよな」というふうに感じてしまう。

⑤ 健康上の悩み

体力の衰えや病気、ケガなどにより教育実践を続けることへの困難さの自覚である。

〈事例 男性 教職歴22年〉 昨年轻いムチ打ち症にかかりました。疲れやすく、眠気がし、いろいろする。約束を忘れてしまったりで、親との信頼関係がくずれたりした。休むわけにはいかなかった。若くないなと改めて感じた。子どもが待っていると思うと休めない。それで逆に子どもとの関係に無理がいってしまい、大変だった。健康面でも、授業でも親の信頼をつないでおくことができずに、自信を失ってしまった。

〈事例 女性 教職歴39年〉 重い更年期障害にかかり、精神的に鬱状態になった。自律神経がおかしくなり、眩暈、吐き気がして、わけもなく子どもにあたりたくなる。朝も起きられなくなる。そんな状態が3年ほど続いた。辞めたかったが家族を養っているので辞めるわけにはいかなかった。イライラしたので子どもにあたったり、授業にならなかったりする。休みたくても同僚に迷惑がかかると思うと休めない。休みたいときに休めないことが一番辛い。

⑥ 子どもの特性に起因する危機

児童をどのように理解し、どのように指導すればよいのかという悩みは、「すべての教師が1年中持つ悩み」である。ここでは、こうした一般的な悩みではなく、とりわけ指導が困難であった場合である。これには、いじめの発生と高学年担任の場合とがある。

⑦ いじめ

いじめの発生およびその指導について、教師としての力量不足を痛感させられるという危機である。

〈事例 男性 教職歴21年〉 ある子がいじめにあい、集団リンチを受けていたことがあった。2ヶ月後にわかり、わかったときはどうしようもなくなっていた。子どもが助けてくれという信号を出していたはずだが、気がつかなかった。他の教師に言われ、聞いてみるとやはり

おかしい。その子が朝早く教室に来て皆に「お早うございます」と言っていたのを見て、僕は礼儀正しい子だなとしか思わなかった。後で考えれば、皆に「お早うございます」と言わないといじめられるから、ということだったらしい。いじめの理由は、1, 2年生のときいじめた仕返しをされているらしい。集団のチーフは手を出さず、目で合図してやらせる。実に巧妙。

その子に聞いてもいじめられていないと言う。母親に言ったら、「そんな馬鹿なことはない」と、身体中見せられた。蹴られてできた青痣がいっぱいある。私の方から投げかけてようやく学級会でうちあけ始めた。女の子などは、先生に言ったら自分もいじめられると思って我慢を重ねていたのだと思う。そういうことがあって一番悲しかったのは、子どもとの信頼関係。あるとと思っていたものが崩れた。自分の人間性、子ども達との人間関係がこんなに薄っぺらなものだったのかと、それがショックだった。

<事例 男性 教職歴22年> 組合の役員で2年間現場を離れていた。戻ってきて6年生を担任した。そのクラスは、出産や転勤などで担任が2人も代わっていて、一番荒れていた。ボスの男の子と女の子がいて、その子達を中心にしてすべてが動いている感じだった。声をかけても全然教師の方を向いてくれない。僕の触ったものは触らない。(教師に) 声をかけてもらわないように自分達でガードして、一歩も中に踏み込ませないようにしていた。子どもへのいじめもあった。1学期間本当にうまくいかず、苦しかった。

⑤ 高学年の子ども

児童の気持ちがつかめない、思うような指導ができないなどであり、特に高学年担任の場合に多い。こうした悩みは新任時にもみられるが、このカテゴリーに属するものは経験を積んだ後に体験するものであり、新任時の悩みと区別される。

<事例 女性 教職歴19年> 高学年になると小グループに固まり、その対応が難しい。(6年を担任したとき) ボス的な子がいた。その子は腕力があって、陰にまわって他の子に悪さをさせる。気持ちが抑えられず、怒るとものすごい。お兄ちゃんも不良がかっていた。親は「自分より弱いものをいじめは駄目。だけど、自分より強いものからいじめられたら、やり返せ。」と、暴力を肯定していた。その子を中心としたグループに振り回されていた。

一人一人を見てたらいいんだけど、集団としてみていくと、リーダーとしてやっていける子が育ちきれない。とてもまとめにくかった。去年受け持ったクラスもそんな感じ。言葉のきつい子、陰湿な感じの子が多くかった。

<事例 女性 教職歴20年> 6年生を受け持って、最近の子どもは荒れていると思った。いじめ、決まりを守らない、学業不振など。その子達のやる気を起こさせたり、自分を見つめさせる努力をした。でも効果なし。注意し続けたのが、かえって「うるさい」と反発される。教師が親身になっても、子どもはそれほど心を開いてくれないことに無力感を感じる。これらの子は、中学に行って不良になってしまう子が多い。生活態度を直すことが出来なかつたこと、やる気を見いだせないまま卒業させてしまったことは、苦い思い出。自分の力量の無さを感じる。

③ 父母との関係に起因する危機

ⓐ 父母とのトラブル

親が教師を信頼してくれないと、父母会で親と対立してしまうなどである。

<事例 女性 教職歴21年> クラスで問題があり、保護者会で名前を出さずに問題のことを話した。ところが、親たちの間で誰だか分かってしまった。学級長をしている親の子どもで、わがままで、陰のボス。その親が、怒って学校に電話してきた。そのことで何回か夜保護者会をした。その親に付く人と、教師に味方する人とで、クラスが2分されてしまった。保護者会

に出るのが辛くて、学校でビールを飲んでから出かける、ということもあった。

その子が私立を受けるので、「間に合うよう調査書を××時までに書いて欲しい」と言ってきたことがある。後で聞いた話しだけど、あいいうことがあったあとなので、(親が)見るためには1通余分にもらつたらしい。それほど教師を信じていなかつた。親がそうだから、子どもはその倍言うことを聞かない。本当に苦労した。

⑤ 地域の特性

学区の持つ地域的な特徴が教育に影響している場合である。たとえば、生活指導が特別に大変な地域であるとか、非協力的な新興地区などである。

<事例 女性 教職歴18年> この地区は生活底辺地区で、3倍4倍の労力を使う。「静かにしよう」と決まりを決めても、きかない。忘れ物が多い。忘れ物をしないようにと、家庭に呼びかけても効果が無い。保護者会も36人中10人しか来ない。親が生活に追われていて、子どもの教育に関心がない。高校へ進学しない子が多い。子どもを置いて出ていってしまう親もいる。離婚が多く、夜逃げしてきた家もある。何回やっても躊躇がうまくいかない。厳しく言うと、1年生でも「くそばあ」と反抗する。家庭的に背負ってきているものがすごく多く、疲れてしまう。とにかく生活指導に時間がとられる。教材研究の前に、生活指導で精力を使い果たしてしまう。この地区的先生方は疲れている。

<事例 女性 教職歴24年> 親は生活に追われて自分のことに必死で、子どものことをじっくり考える余裕がない。といって、塾にはどんどん行かせる。学校への協力はない。懇談会に来ない。役員を逃げる。地区的連帯意識もない。学校に対しては、この程度しかやらないなどという目で見ている。学校に期待していないのではないか。

④ 職場の人間関係に起因する危機

職場の同僚との対立や上司との意見の食い違いおよび教職員組合をめぐる悩みである。

<事例 女性 教職歴39年> 40代で一番大きなことは同僚との人間関係。20年以上続けてきたという自分の経験に自信を持ってしまい、同じ年代の先生方と衝突が多くなる。自分より上か下だとそれなりにゆとりをもって接することが出来るが、同じ年齢だと駄目。それぞれ自分のやり方、教育方針があり、自信を持っている。お山の大将になりがちだった。お互いの教育に対しての考え方の違いで学年会等で対立しあい、しこりとなって、2人ほど親友を失ってしまった。

<事例 男性 教職歴19年> その学校は組合活動が盛んで、ほとんどが組合員だった。予備知識がなくて組合に入ったが、私は子どものことで頭がいっぱいだった。当時は勤務時間などでぶつかり合いが多く、ストライキになった。私はまだ新米でもあり、子どもを放り出してまでストに参加はできなかった。すると、今まで気安く話し合えた仲間が、急によそよそしくなったり、言葉の調子が鋭くなったりで、対応が変わってきた。組合の人間関係という予想もしなかったことから、学校へ行くのが気が重かった。他の学校へ移りたいと思った。

⑤ 制度に起因する危機

教育制度への不満である。たとえば、指導要領の問題や受験競争への不満、県の教育方針や教員の採用方式等への不満である。

<事例 女性 教職歴20年> 新指導要領は、個性重視と言いながら分からぬ者はそれでいいという姿勢。教育には政治家が口を出して欲しくない。教育の専門家が考えるべきこと。教師は子ども達のために安心して教育に打ち込みたい。分からぬ子に分かるようにさせたいと思っているのに、それに専念できないような状況がある。

<事例 男性 教職歴21年> 不満内容を具体的に言うと、採用の仕方がペーパーテストだ

けであること。産休補助とかで、経験を積んできた人を優先採用してもいいと思うのにしない。あと、労働条件が厳しい。教員が余っているといつても、一人当たり授業時間が多い。雑務をする時間がとれない。受験制度も問題。小学生でも塾通いが増えていて、勉強するところは塾で、学校は休息するところという風潮がある。このために、こういう教育がしたいと思ってもできない。

⑥ 家庭生活に起因する危機

妊娠、出産、育児、家族の病気など家庭生活での大きな出来事と、教職を両立させることとの板挟みでの悩みである。

＜事例 女性 教職歴35年＞ 出産したとき辞めたいと思った。以前は市の仕事を積極的にやっていたが、それができなくなり、学校での存在感が薄くなっていた。家庭にかける時間が多くなり、公的な面において非常に悩んだ。だから、この時期は、いつ辞めようか、いつ辞めようか、といつも思っていた。そのうち若い女の人が指導主事として出てくるようになり、負けたと思った。プライドを持っていたので、追い詰められた気持ちになった。

＜事例 女性 教職歴21年＞ 若い先生方が夜遅くまで残って勉強したり、互いのクラスのことを話し合ったりしている。しかし、自分は育児のために早く家に帰る。皆と同じように勉強したいのに、と思って泣いたこともある。自分が遅れていくような気がした。

＜事例 女性 教職歴17年＞ 研究指定校で忙しかった。特に高学年担当だったので大変だった。保育所に子どもを迎えに行くと、他の子はもうみんな帰って一人でポツンと待っている。「自分の子どもにこんな辛い思いをさせているのに、なんで他の人の子をみているのかな」という気持ちもあった。学校が近かったので、子どもが病気の時など、一人で家で寝かせ、休み時間に様子を見に行ったりすることもある。そういう時、「辞めようかな」と思ったことがあった。

＜事例 女性 教職歴19年＞ 家の中が汚いとか、子どものことが手抜きになるなどで、主人とやり合った。その時に「辞める」とよく言った。子どもに「お母さんは先生だもんね。お母さんじゃないもんね。」と言われたこともある。本当に顕著に現れたのが息子の高校受験の時。自分の子どもの学習状態を全然把握していなかった。もう受験には間に合わない。ちゃんと子どもを見てあげればよかった。私は何をしてきたのだろう。親としては失格だな、と痛感した。あの子はこれから苦労するだろうとおもう。自分のやってきたこと、あまりかまつてあげれなかっただけが、我が子に影響してしまったことで悩む。我が子に対する負い目がすごくある。食べさせてただけ。仕事と家庭とどっちをとるか、葛藤がすごくある。

(2) 現在危機の渦中にいる事例

現在がこれまでの最大の危機だ、と回答した教師がいる。心理状態を全体的に理解可能なよう、やや詳細に述べる。

＜事例 女性 教職歴20年＞ 自分もただの教師だな、取り替えのきく教師だな、と感じる。30代の後半を過ぎてから。自分の教師としての能力はこの位だという見通しが持てて、自分がやっても若い先生がやっても変わらない。自分の力がこんなものなんだなと納得した時は、自分に腹立たしいというか、こんな気持ちでやっていいのだろうか、という気持ちが起こった。結婚、出産の時は一生懸命だったが、子どもが成長して、さあいざ教育に情熱が持てるかというと、若いころのようには情熱が持てない。情熱がなくても、技術でカバーしてしまうから。今担任している子の方が、若いころ担任した子よりもよく教わってはいると思うけど。子どもが好きか、愛情を持っているかと今聞かれたら、給料もらっているから、というのが強い。

子ども達に遊びに誘われても、「休む時間がなくなってしまうから」と断ってしまう。昔なら子どもとわいわいやっていると、楽しかった。エネルギーが沸いてきた。でも今は疲れてしまう。教師が身体を動かさないと、子どもはなかなか言うことを聞かない。しょうがないなあという気持ち。諦めている。

子育てに一段落し、自分を見つめる時期が来た。それまではそんなこと考えなかった。5年前から現在までその状態は続いている。もし今辞めなければならないことがあったら、辞めてしまう。長年やってきて限界が見えてしまっているから。能力に限界感じるから。

もっとすばらしい教育方法があるのかも知れないのに、研究する情熱が持ち切れない。指導書を見てこうやるんだな、という教育しかできなかつたので、誰がやっても同じ。一人一人にあった教材を与えたい。でも、準備するには体力と気力がないと無理。皆サラリーマン化されている。自分は嫌だなと思っても、諦めたところがあってそうなってしまう。そんな自分がいらだたしい。

<事例 男性 教職歴22年> もし倦怠期があるとしたら、今。今の学校が9年目で、しんどさと疲れが残る。できれば1, 2年現場を離れて勉強したい、という気持ちがものすごくある。子どもがこの4, 5年すごく変わってきていると感じる。特に6年生。話している中身がぴったりこない感じ。うちとける学級づくりをするのが、とても難しい。前に卒業させた6年生はすごくいいクラスだった。でも、2月ごろにいじめが出て、自殺を訴えたりする子どもが出て。子どもの気持ちがわからないなあ、と。これはもう教師が続かなくなってきた、と思った。

その時は、他の先生から5, 6年生ばかり持っているからそんな気持ちになるんで、1, 2年生を持ってみたらと言われて、1, 2年生をもってみた。一緒に歌ったり、踊ったりしてみて、それまでとは別な意味で子どもはかわいいと思うようになった。それで気持ちを持ち直して5, 6年生をもったけど。塾通いも増えていたり、子どもの生活そのものにストレスがあるし、疲れもある。やっぱりのってくるのが難しい。それとお母さんたちも、学校はそれはそれとして、学習塾をかなりのウエートで重視している。だからPTAの活動や教師とのつきあいもほどほどで、子どもと一緒に育てていこうとするところが少なくなってきた。難しい時代だなあ、と思う。若いころはそんなこと気にしないで突っ走っていればよかったが……。突っ走っていれば、親も子どもも着いてきた時代から、今は「そんなにやってもらわなくていい」(と親は考えているようだ)。子どももほどほどでいい。教室でほっとしたい。外で勉強しあおられているから、教室ではのんびりしたい。以前とは違った教師と友達を求めているようだ。

教えるノルマがきつい。とにかく教科書だけは終わらせなくちゃ、と焦る。今の3分の2くらいになれば、遅れている子も取り戻しの指導ができるんだけど。それに研修の時間がもう少し欲しい。今の子どもも社会も変化が激しい。社会の要求する水準が変わってきてている。なのに教師はその日その日を一生懸命で勉強する時間がとれない。5年10年に一度は現場を離れて自分の好きな勉強をし、人間的な面も洗い直すといった教師のオーバーホールが必要だと思う。今は使い捨て。だから、若いうちから管理職になって現場を離れてしまう人が多い。現場で子どもと過ごす喜びを感じられなくなっている人が多い。

昨年から今年にかけて、体力面でも授業でも、子どもや親の信頼をつないでおくことができず、自信を失ってしまった。腕づくで引っ張っていくタイプだったが、今までのやり方では通用しないと痛感している。今の子どもは寂しがっている。ベタッと教師に頼りたい。ノルマに負われる教師がどうやってこれに応える人間関係を作っていくかが課題になっている。自分は(今までのやりかたから)なかなか脱皮できない。教師は……子どもはすきだから続けたいと

いう気持ちはある……だけど教師一本じゃ続かないし……半年でもいいから現場を離れて気持ちを入れ替えたい。自分という人間を気を抜かせてもらいたいというか、青い空をゆっくり眺めてみたい、と思う。前は、放課後ゆっくり校庭を子どもたちと駆け回るのが解消法だった。2時間も子どもと走り回っていれば、嫌なこともすっきり忘れられた。今は本当にそれができない。いろいろな会議が入るから。できれば他の仕事をするかして、ゆっくり休みたい。

今の学校のシステムの中で教師がのびのびと生きていくのは無理。子どもを理解してあげようという気持ちの人では教師をやっていけない。自分の方へ引っ張っていくことになんの疑問も持たない人でないと……。自分の娘は、教師には絶対したくない。

(3) 時期と危機

① 情熱度の変化

Fig. 1 は、情熱度尺度への完全な回答が得られた21名（男性教師7名、女性教師14名）の20年間の平均値を示したものである。男性教師は、1年目から5年目にかけて高い値を示す。10年目に最低の値となる。その後は安定した情熱を持続する傾向がある。これに対し女性教師は、6年目に最低の値となる。それ以後は緩やかに上昇し、14年目に最高の値を示す。その後また18年目ごろまで下がる傾向が見られる。

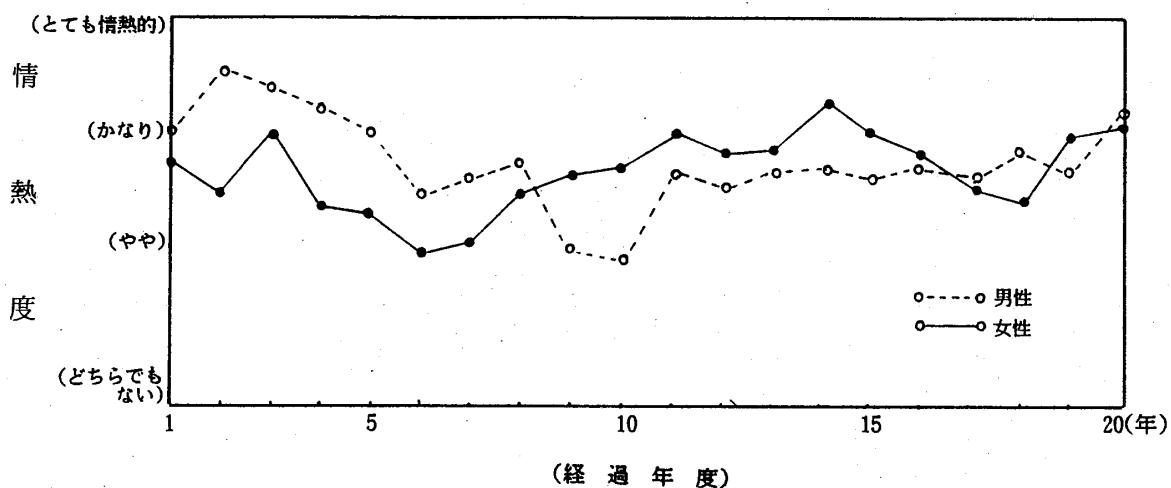


Fig. 1 情熱度の変化

② 教職歴と危機

教職歴年数と危機の内容との関係を示したものがFig. 2 である。最も経験年数が短い教師は教職歴15年であるので、厳密には経験年数が16年を越えた時点から対象となる教師数が減少していく。しかし、大まかな傾向を読み取る参考になると想え、図には教職歴24年までを示した。なお、複数年度にわたるものもあるので、出現頻度とは一致しない。

危機を全体としてみると、初任時の危機を最大として次第に減少していく、15年目ごろから20年頃にかけ再度増えていく傾向が見られる。

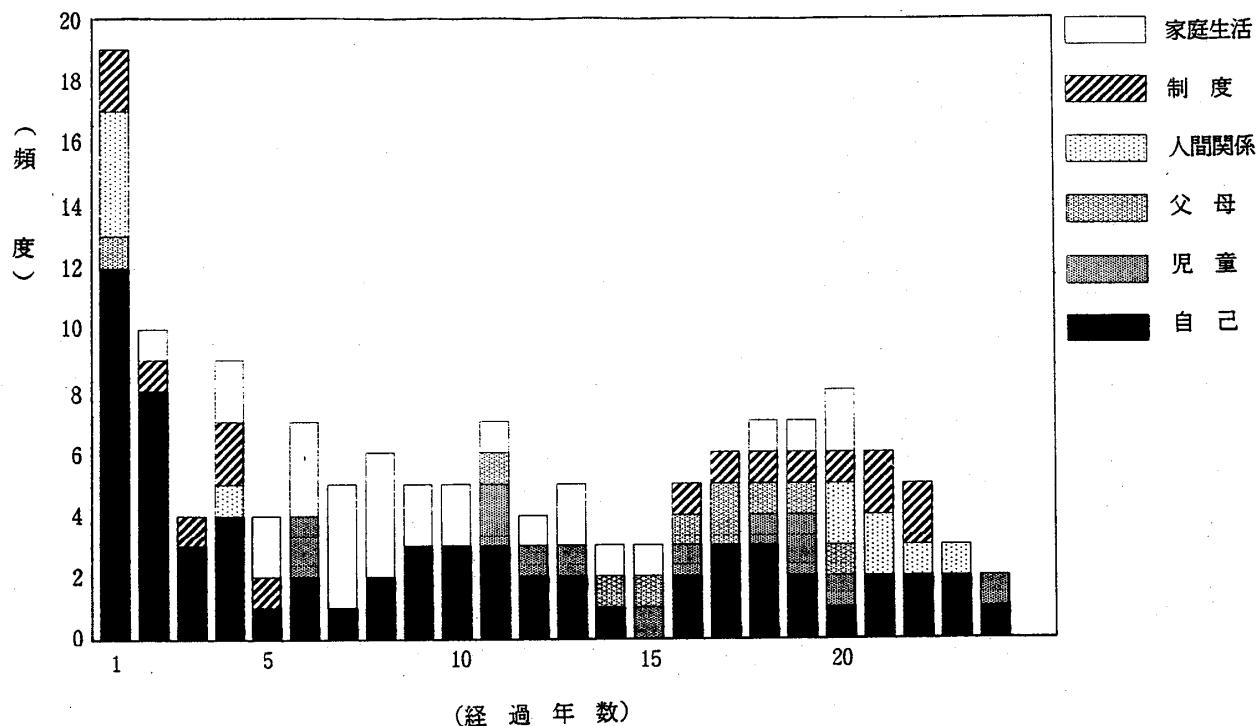


Fig. 2 危機の生じた時期

これを内容別にみると、まず自己に関する悩みは初任時が多く、次に10年目ごろに二つ目の山がある。さらに16年以降に3たび出てくる。初任時から2年目頃の自己に関する悩みは、言うまでもなく初任時の悩みである。10年目頃の悩みは、マンネリと自信喪失の悩みであるが、特に男性教師の悩みが中心を占める。これに対し、16年目以降のマンネリと自信喪失は、女性教師が中心である。

子どもの特性に関する悩みは、6年目以外はいずれも16年目以降に出現している。父母との関係での悩みは、特別な親がいるクラスを担任した時と、勤務校によるのであり、教職歴による差異はみられない。職場の人間関係での悩みは、初任時と20年目以降が目立つ。制度上の悩みは、5年目以内と16年目以降にみられた。

家庭生活での悩みは、とりわけ大きな危機であった時だけを記した。なお、調査対象となつた女性教師が結婚したときの平均教職歴は約4.5年であり、第1児の平均出産時期はその約2年後である。

3 危機の乗り越え

それでは、教師は危機をいかにして乗り越えてきたのだろうか。危機の乗り越え方を内容により、次のように分類することができた。

- ① 教育力量の向上による乗り越え
- ② 精神状態の変化による乗り越え
- ③ 子どもとの係わりによる乗り越え

④ 教師との係わりによる乗り越え

⑤ その他

むろんそれぞれの危機の乗り越え方には、これらいくつもの内容が重複して含まれるものが多いことを、断っておかねばならない。また、危機の乗り越え方は、当然危機の内容と係わる。危機の内容との係わりについては考察で検討することとして、ここでは、危機の乗り切り方を具体例を挙げて詳述することとする。

① 教育力量の向上による乗り越え

具体的には次のような内容である。「研究授業を進んでやる」「自主的な研究会に参加する」「教材研究や指導法を積極的に研究する」「自分の毎日の実践の記録を見て、改善すべき点を見つける」「関心を広げ、ネタを探す」などである。

〈事例 男性 教職歴15年〉 自分を高めていくのは研究しかないと考え、校内研などで積極的に名乗りをあげ取り組んだ。それが自分に自信をつけ、いい経験になった。

〈事例 女性 教職歴24年〉 今の子どもにできるだけ身近なものをだして、ついてこさせる。そのために本を読んだり、新聞を読んだりして頭を切り替えている。テレビや雑誌なんかでネタを探す。

② 精神状態の変化による乗り越え

「自分への見方を変える」「青年教室に通いいろいろな分野の人と接して、視野を広げた」「目標をつくることにより、節目を作る」「気持ちを持ち直して取り組む」「意志を貫くつもりでやる」「とにかくやるしかないと頑張る」「抵抗精神でやる」などである。

〈事例 女性 教職歴22年〉 新任の頃、子どもが言うことをきかず、自分の人間性を責め、自分を変えようとすごく努力した。最後には変えられないと悟り、しょうがない自分を見てもらおうと思った。いけない面はいけないと子どもが見てくれればいい。その子を一生担任するわけではないのだし。自分は自分の人間性を見てもらうしかない、と思ったらふっされた。

〈事例 女性 教職歴21年〉 相手は子どもだ。私が一生懸命やれば必ず変わるはずだ、と自分に言い聞かせた。今精一杯やることで、その子が大きくなった時にふつと思いつだしてくれる何かを与えられればいいのではないか、と思うようになった。

③ 子どもとの係わりによる乗り越え

「子どもと一緒に遊んで理解に努める」「いっそう子どもに打ち込む」「子どもと接することで気がはれる」などである。

〈事例 女性 教職歴19年〉 とにかくなんとかしなきゃということで、(教育に)打ち込んだ。相手は人間だから、のめり込めばどこかではね返ってくる。打ち込めばそれだけどこかで返ってくる。それが忘れられなくて、教師を続けていられる。

〈事例 女性 教職歴36年〉 子どもに夢中で入り込んでいった。子どもはとてもかわいかつた。子どもと共に遊び、勉強し、掃除も一緒にやった。その中で情熱的な喜びを感じた。

〈事例 女性 教職歴21年〉 嫌なことがあった次の日に、学校へ行くのがつらい。そんな時、「よし、戦場に行くぞ」と気張って出向く。そして、クラスの子の顔を見て、フツといい顔をしているのを見つけると、すべてがふっされる思いがする。子どものいい表情、いい行為をみつけることがある。それが教員を続けていけるもとになっているのかも知れない。

④ 教師との係わりによる乗り越え

「先輩教師からアドバイスを受ける」「優れた教師の姿勢に学ぶ」「同僚に相談したり、励まし合ったりする」「校長が配慮してくれた」「研究会仲間の励まし」等による危機の乗り切りである。

善悪判断を変容させる条件

<事例 男性 教職歴19年> 先輩教師から目標を持ったほうがいいとアドバイスされ、自分はだらしなくやってきたのだなと気づいた。子どもにもだらしなさがうつる。面倒だから見逃していた。

<事例 女性 教職歴17年> 「ああいう教師になりたい」「ああ、あんなふうにすればいいんだ」という刺激が絶えずあったので、次第に教師というものが見えてくる感じだった。子どもとの係わりだけでなく、良い教師に巡り合えるってことが自分を生き生きさせてくれるのだと思う。

<事例 女性 教職歴21年> 先輩教師から、「今（子育てで）大変だけれども、今を乗り越えてしまえばそれが力となり、子どもたちに返していく。だから、後悔しないためにも頑張りなさい」と言われた。この2、3年を乗り切れば教師を続けていくと思ってやってきたが、当時はつらかった。

⑤ その他

「いろいろな個人的な工夫」「家族などの支持」「転勤」「時間が過ぎるのを待つ」「慣れ」などによる乗り越えである。

<事例 女性 教職歴40年> 時間は自分で作るもの。専業主婦の2倍は努力した。できるだけ子どもと一緒にいるように心がけた。仕事はできるだけ家に持ち帰り、子どもと一緒に座ってやった。お互いにノートをもって、その日の出来事を親子で教え合った。義母に面倒みもらつたが、お祖母さんとお母さんは違うということを小さいころから言い聞かせてきた。それで、母親に言うべきことは必ず伝えさせるようにした。教師は育てるプロなのだから、自分の子どもくらい立派に育てられなきゃダメ。学校の児童は私がいなくても親がいるけど、自分の子は他には誰もいないのだからしっかり面倒みなければいけない、と自分に言い聞かせてきた。

<事例 男性 教職歴33年> 田舎では若い力が發揮しきれない。1日中子どもとつき合つていてこれでいいのかな、という気があった。それに、自分の考えが組織の中で潰されるよう感じた。それで、採用試験を受けて、都に移った。

4 教職の現在

(1) 教師の意欲を減退させる要因

多くの教師が、教職を継続するのに現在多くの困難があることを語った。その内容は「仕事の内容に関わる要因」「子ども・親に関わる要因」「教師に関わる要因」「制度に関わる要因」の4つに分けることができた。これらの主要な内容を分類に従い列挙する。

① 仕事の要因

- ・ 雜用が多く、ゆとりがない。
- ・ 教えるべきことが多すぎ、やりたいことができない。
- ・ 子どもの成長、実態に合わない内容を教えなければならない。
- ・ しつけなど、教師の仕事の範囲が広くなった。
- ・ 行政からの圧力が多い。

② 子ども・親の要因

- ・ 子ども、親が変わってきた（具体的な内容は後述）。
- ・ 親と教師の考え方とに齟齬がある。
- ・ 教師がいくらやっても親は理解してくれない、という諦めがある。
- ・ 複雑な事情のある家庭が多い。

③ 教師の要因

- ・ 教師の個性が多様になって、まとまりがない。
- ・ 若い「サラリーマン」教師が多い。
- ・ 若い教師の考え方や感じ方の理解に苦しむ。
- ・ 教師間での足の引っ張り合いがある。
- ・ 教師同士注意し合うことが少なくなった。
- ・ 指導的な教師が少なくなった。
- ・ 経験主義で済ませてしまう。
- ・ 教育的でない管理職の言動がある。

④ 制度の要因

- ・ 学校全体の雰囲気が管理的である。
- ・ 指導要領等の問題など。

上で教師や親が変わってきていたとの意見があったが、その具体的な内容としてあげられたのは、以下のようなことである。できるだけ教師の表現どおりに記す。

＜子どもに関して＞ 「思いやりがない。」「愛される喜びは知っているが、他の人を愛する喜びを知らない。」「友達同士で親切にすることができない。」「対人関係に苦手意識を持っている子が多い。」「自分を抑えて挑戦していくとする気構えを持つ子が少ない。」「がんばれと励ましても、辛いことを避けてしまう。」「根気がない。」「真剣にやろうという部分が表面に出でこない。」「やれるのにやらない子が増えた。」「自主性がない。」「指示しないと動けない。」「人の言いなりになりやすい。」「自分が好きなことなどはやるが、そうでないことはやらない。」「大人にやってもらおうという意識が強い。」「素直だが、素直すぎて、何でもハイハイと言い、そのとおりにやるかと思うとやらない。」「以前は教師の言うことが子どものなかにスマーと入っていたが、今は1回耕さないとうまく入っていかない。」「ひよわ。」「わがまま。」「夢を失っている。」「疲れている。」「物を大切にしない。」「親を尊敬していない。」「家庭生活がしっかりしていない子が多い。」「基本的な生活習慣が身についていない。」

＜親に関して＞ 「学校に期待していない。」「教師を1種の職業としかみていない。」「教育に目をむける親が増えたが、勉強中心の親が増えた。」「基本的な生活習慣をつけることやしつけを忘れている親がいる。」「過保護な親と過放任の親が増えた。」「子どもの教育について考え方方が甘い。」「自分の意見を言うようになった。」「（集団の中にいることを考慮しないで）家庭の方針でこうやります、と主張する親が多い。」「自分勝手、自己中心的。」「自分の子どもが言うことを全面的に信じ、それ以外のことはきかずに行動する。」「自分の子どもしか目に入らない。」「協力しようという姿勢が弱い。」「地域の連体意識がない。」「生活に追われ、自分のことに必死で子どものことを十分省みない。かといって、子どもにはどんどん塾に行かせるなど、生活がアンバランス。」「本当に子どものことを考えていない。」「母性愛が薄くなっている。」「何かあるとすぐ教育委員会に言う。」「すぐ教師を批判をする。」「口だけは達者になった。」

(2) 教職の魅力

それでは、教師は教職の魅力をいかなるものと感じているのであろうか。面接の中で表現された教職の魅力を表す言葉を幾つか拾ってみる。

「夢をいつまでも追いかけている。」「人間を変えられる。すぐにはわからないところがいい。楽しみがあって。」「今すぐ結果は出ないが、何年か先にその成果が見られたとき。」「思いがけないすてきなことが未来にあると思えること。」「子どもは刻々と変わっていく。それを見ていけること。」「自分が一生懸命取り組んだことが子どもから返ってきたときに感じる。」「母親が自分の子どもを見る見方も変えられる。」「その子の成長の一端に関わっていたんだな、と思え

ること。」「子どもの関わりの中に、教師とその子だけしか分からない感動がたくさんある。」「表面には現われないが、通じ合えるものを感じたとき。」「母親から人生を学べる。」「性差を考えなくていい。つまり、男が偉いという観念にしばられなくてよい。」「子どとのコミュニケーションがおもしろい。」「子どもが純真でかわいい。」「人間で変わる可能性をたくさん持っている。固定したものではなく、環境や愛情とかで変わりうる。」

考 察

1 危機について

(1) 時期と危機

危機が生じがちな時期を取り出して、その時期の危機の特徴をまとめてみよう。

① 新任時

かなりの教師が理想と現実のギャップを感じていた。また、ほとんどの教師が指導の未熟さに悩んでいた。さらに、先輩教師に型にはめられるようで辛かったと感じた教師も多かった。なお、女性教師は男性教師よりも、自分は教師に向いていないのではないかという疑惑を体験する傾向がみられた（男性3／9、女性16／23）。

② 出産・子育ての時期

結婚により仕事が困難になった、と回答した教師はいなかった。男性教師の場合には、かえって気持ちの切り替えになった、という回答が目だった。危機が生じるのは、出産により子育てが始まる時期であった。既婚女性教師の大部分が、教師を辞めようかと真剣に考えるなど、この時期を大きな困難として訴えた。男性教師で、これに当たる悩みを語ったものはいなかった。女性教師にとり、出産から子どもが学齢期に達するまでが、一つの大きな山である。

③ 子育てが一段落した時期

意外なことに、多くの女性教師は子育ての大変さを切り抜けたあとで、再び別種の危機に襲われた。すなわち、マンネリなし自信喪失である。理由はいろいろ考えられる。大変な時期を乗り越えたという虚脱感。周りを見回す余裕ができたため。体力的な衰えの反映。責任ある仕事の拡大による忙しさ。いずれにせよ、女性教師は、男性教師に比べ、出産・子育てを乗り切る大変さに加え、それが一段落したときに来る危機を乗り越えるという2重3重の困難を背負っていると言わざるを得ない。

④ 管理職になった時

ほとんどが子どとの直接的な接触が絶たれたことを寂しく感じており、「後悔」を覚えた教師もいる。また、現場との違いに戸惑いを覚えた教師も多い。管理職としてのアイデンティティを持ってからは、最近の特に若い教師の教育への姿勢に幻滅や不満を訴えることが多い。

⑤ 同一校に長期間勤務したとき

同じクラスを担当した2年目がマンネリになると語った教師もいたが、同一校に長期間勤務してマンネリを感じた教師が多かった。自分にある役割が固定化されてしまい、「自分が片寄ってしまうのではないか」という不安を感じる。

⑥ 高学年を担任した時

児童に関する悩みで最も多かったのが、最近の子どもの変化である。なかでも、高学年をここ数年受け持った教師が多い。子どもが変わり、教師との間にズレが生じている。彼らベテランの教師がこうした感じ方をしていることに、注目する必要がある。子どもの急速な変容に主な原因があるのか。それとも彼らベテラン教師が子どもに求めるものが、旧態依然たるもので

あるがゆえの問題なのか。すくなくともここには、経験だけではやっていけなくなっている教師の姿が読み取れる。

(2) 情熱度と危機

新任時に悩んだ教師は多いが、情熱度は高かった。この高さが、新任時の困難を積極的に乗り越えさせる原動力となっていると思われる。男女とも6年目頃を目指して下降する。男性の場合には、10年目に最低の数値となる。すなわち、マンネリと自信喪失の時期である。しかし、この時期を過ぎると、後は比較的安定した情熱度を示す。その意味で、10年目頃は男性教師にとり、一つの大きな山と言える。

これに対し、女性の場合には6年目に最低の値を示した。この時期は、第1児出産の平均的な時期である。3分の2の女性教師は出産時に情熱が低くなったと記入していた。このことは、出産時が女性にとり一つの危機であることを裏付けるものであろう。しかし、出産以後は、女性教師の情熱は高くなっていく。困難なこの時期を何とか乗り越えようとする気持ちの持ち直しを読みとることができる。そして、15年目に初任時にもまさるほど情熱度が高くなる。子どもが学齢期になりある程度手がからなくなっこったことに起因すると思われる。しかし、その後再び情熱度が下がり始める。したがって、このころが女性教師の教師としての充実期であるのかも知れない。

2 危機の乗り越え方

次に、危機の内容と関わらせながら、代表的な乗り越え方を見ていくこととする。

① 自己に起因する危機

② 新任時の危機

新任時はまさに疾風怒濤の時期とも言える。いろいろな面で戸惑い、力量のなさを痛感し、教師に向いていないのではないか、と悩む教師も多い。新任仲間と夜遅くまで話し合ったり、先輩教師に相談しコツを教わる。とくに、良いと思う方法を見つけ取り込んでいく積極性が、この時期の危機を乗り切る助けになった例が多い。

多くの教師は、美化した子どものイメージと現実の子どもの間のギャップに戸惑っている。しかし、新任時はまだ若く、独身であり、「今ほど忙しくなかった」等のことで、子どもたちと多く遊んでいる。それが、子どもを理解することに役だったし、ストレス解消法ともなっていた。

ある教師は、子どもに完全になめられ、ついに学校を飛び出してしまった。恩師に励まされ、この危機は何か乗り切ることができたが、この時の体験がその後の教員を続けていくに際しての大きな教訓となっていた。この例に代表されるように、この時期の戸惑いや悩みは、それを通して教師として成長していく大きな養分となっており、この1、2年が教師として最も急速に成長する時期である。

⑥ マンネリおよび自信喪失

10年目前後にマンネリや自信喪失の危機に陥るのは、男性教師が多かった。力量もついてきて、ある程度「流してやっていいける。」また、自分の実践を客観的に見る目と余裕ができる。そうした時、「問題意識を持たなくなってる、手を抜いている」自分に気づき、マンネリの意識を持つ。若い教師の優れた実践を見て自分は何をしてきたのだろうと、自信喪失に陥る例もある。女性の場合には、10年目前後は出産、育児で困難な時期である。このために家庭生活の悩みが主となり、マンネリや自信喪失の危機が訪れるのは15年目以降である。教師として、妻として、母親として必死で頑張ってきた女性教師が、自己を振り返る余裕ができる。自分の教師

としての成長のレベルもみえてくる。さらにこの時期には、体力の衰えという客観的に不利な状況も加わり、「若いころのようには子どもと遊べない」。こうしたことから、マンネリや自信喪失を体験し、「このまま教師をやっていいのだろうか」という疑惑にかられる。

マンネリや自信喪失は、しかし、大部分のケースで、教師としての理想や良心の反映という側面がある。もっと高い実践要求を自らのうちに持っているからこそ、マンネリと感じ、自信喪失に陥るのである。そして、また多くの場合、マンネリや自信喪失状態にある彼らが、現実にひどい実践をしているわけでもない。マンネリ状態にある教師の「今担任している子のほうが、若いころ担任した子よりもよく教わっているとは思うけど」という言葉に代表されるように。

マンネリの克服の仕方には、校内研などで研究授業を進んでする等に代表される積極的な解決の他に、人間としての視野の広さを持つという方向での乗り切り方がある。後者の場合にも、マンネリをむしろ積極的な契機とした姿が読みとれた。また、学校を移るなど、外部環境の変化により初心を取り戻そうとする姿も見られた。さらに、マンネリから脱却しようとしてもできない焦燥のなかでじっと「時が来るのを待つ」という教師もいた。長い教職生活の中では、ある時期にマンネリ感を体験するのは不可避であると思われる。そうしたマンネリのなかでも耐えうるということは、教職継続に必要な能力の1つなのかもしれない。

多くの教師は、長い教師生活の中で「子どもたちをどうしても把握しきれない時」「クラス内でいじめや登校拒否等の問題が生じたとき」「他の教師と比較したとき」等に、自信喪失を体験している。自己の教師としての能力への疑惑のなかで、多くの教師は自分を成長させる努力をしていた。ある教師は、毎日実践記録をつけ、自分の実践を点検した。ある教師は現場を離れ、勉強しなおした。ある教師は趣味を広げ、性格を変える努力をした。ある教師は得意な教科を作ることだと考え、得意教科の研究に打ち込んだ。時代にあった教育をするために、若い人から謙虚に学ぼうとした教師もいた。このように、大部分の教師にとり自信の喪失は、自分に不足しているものに気付き、より成長する機会となっていた。自信を喪失し、落ち込んでいる状態から前向きに立ち直ろうとする教師の姿勢とエネルギーに、面接者は圧倒される感じを持った。こうしたエネルギーの基となり、支えとなったのは、担任する子どもの笑顔であり、家族(とりわけ夫)であったと話す教師が多かった。

② 児童の特性に由来する危機

④ いじめ

いじめの発生は、教職歴10年から20年目の間に多い傾向がある。この頃には教師が担任以外に責任ある他の仕事を持つ機会が多いとか、教師がマンネリを感じやすい時期であることと関係があるのだろうか。自分のクラスでいじめが発覚したとき、教師が即座にそれを認めるのに困難が伴うように思われる。親から子どもの身体中にある青痣を見せられて、改めてその重大さにおどろいた教師もいた。いずれにせよ、いじめが発覚した時、教師は自分の実践が上滑りのものであったという反省をしている。そして、毎日日記の交換をしたり、昼食会をグループ毎に開いたり、一緒に遊ぶ時間をとったりするなど、子どもとの触れ合いを増やし、改めて、子どもを見直そうとしていた。また、問題となっている子の家を毎日訪問し、母親や父親と長い時間話す等、父母の協力を得て解決に当たった例もあった。

⑤ 高学年の子ども

この危機のもう一つの原因是、子どもの心理の変化である。特に高学年の子どもの場合である。この事態に直面し、多くの教師は自分の教育的視野を広げ、指導法を工夫するなどの模索を行なっている。たとえば、登校拒否の子どもが出た場合には、それに関する図書を読むとか、

教師仲間に相談するなどして、いろいろと指導法を工夫していた。また、自分の手持ちの興味関心では今の子どもを引き付けられないと感じた教師は、これまで触れたことのない子ども文化に近寄っていったりしている。しかし、これらの悩みの多くは、こうした試みで解決済みのものではなく、多くの教師の現在進行中の悩みであると言える。

③ 父母との関係に起因する危機

あるケースは、1人の母親をめぐってクラスの父母を2分するようなトラブルであった。これは、とにかく親を信じて、教師としての真剣な訴えで大部分の親の理解を得ることで切り抜けた。もう一つの内容は、地域の特性である。子どもの教育へ親の目を向けさせるよう学校からの連絡や懇談会で訴えている。地域の親のそうした一般的な姿勢を改めるところまではいかず、転勤とともに悩みが消失している例が多い。

④ 職場の人間関係に起因する危機

この危機はまず最初に新任時に体験する。新任のために、ベテラン教師に厳しく注意されたり、管理職の意見を押しつけられたりすることがある。また、組織を知らないことからくる人間関係のトラブルもある。これらの悩みは、一定の教育的力量がついたり、慣れにより解決される。

20年を過ぎたところで、再び人間関係での悩みがみられた。初任時には励ましになった同僚が、このころになると経験に裏打ちされた自信が、かえって教師同士の衝突を生む。これは、「自分より上か下だとゆとりをもって接することができるが、同年代だとだめ」という言葉に象徴される。また、同年代、ないし自分より若い管理職が出てくることもこの悩みの背景にあると思われる。多くの場合、こうした悩みは「子どもの中に入って夢中になる」とか「時が来るのを待つ」など、当該教師との対立を避けた形で解決が図られていた。

⑤ 制度に起因する危機

教員の待遇、受験制度、教員採用の在り方等、学校制度に不満を持つ教師が多い。これ自体は危機としては切実なものではない。しかし、これは、他の危機の根底にあるものと解釈することができる。なぜなら、マンネリや疲れを感じる理由として「教えるノルマのきつさ」「労働条件の厳しさ」「受験制度のため思うような教育ができない」等の言葉が頻繁に語られたからである。

⑥ 家庭生活に起因する危機

育児の時期に、女性教師は教師役割と母親役割との葛藤で悩む。特に子どもが母親を求める時期に、子どもをおいて出勤する身の辛さを語る教師は多かった。他の子の面倒をみながら自分の子の面倒を見てやれない母親としての自分に、矛盾を感じている。彼女達は仕事と家庭の両立の難しさを痛感し、教師を継続するか否かの真剣な選択に少なくとも一度は立っている。しかし、「この時期を乗り越えれば、後は楽になる」「今自分は子をもつ母親の立場として貴重な勉強をしているのだ」と自分に言い聞かせ、日々を頑張っている。子どもとの係わりの楽しさが根底にあり、「大変でもあくまでも教師をやっていく」という強い信念が支えとなっている。この時期は、まだ若いということもあり、とにかく頑張るしかないという気迫で臨んでいるので、仕事への情熱はむしろ高い傾向が見られた。「大変な時期だったから、かえって続けてこられた」と述懐する教師もいた。

教師と母親の役割を両立させるために、さまざまな工夫が見られた。たとえば、「家にできるだけ仕事をもって帰り、子どもが勉強する傍らで仕事する」「専業主婦がしているように、食事つくりの姿ができるだけ子どもに見せる」「子どもの年に近い低学年を担任する」「住居を学校や実家の近くにする」などである。このように、この時期は、特に母親としての自覚が大き

な支えとなっているが、さらに夫やその他の肉親の協力、同僚や上司の協力なども見落としてはならない。

子育てをすることによって、「母親の気持ちがわかるようになった」「子どもをせかせず、待っていられるようになった。」等に代表されるように、この時期の大変さは女性教師の力量形成にもプラスとなる可能性を有している。

＜情熱度と危機の乗り切り方＞ 教職の志望動機と危機の乗り切り方に何らかの関係がみられるであろうか。この点を検討する。このために、各教師の志望動機および乗り越え方の積極度を7段階で評定した。評定者は、著者及び教育心理学専攻の大学院生2名および学生1名の計6名である。この評定に基づき、志望動機と乗り切り方の積極度とのピアソンの相関係数を求めた。その結果、 $r = -0.002$ となり、有意な関係はみられなかった。すなわち、志望動機と危機の乗り越え方には関連は見られなかった。事実、志望動機は少なくとも本研究の対象となった教師では、情熱度尺度でも初任時から明確な違いはみられず、いざ教職についてしまえば、志望動機による差異をひきずることはあまりないように思われる。

3 今後の課題

以上、主な結果を考察してきて、学校が現在子どもばかりでなく、教師にとっても困難が多い場になっていることがうかがえた。そして、我々が強く心をうたれたのは、すべての教師にみられた子どもへの真摯な姿勢である。困難な中でも、彼らは子どもの為により良い教育をしていくこと、熱情を奮いたたせていた。色々な困難や危機に出会っても、なおそれを乗り越え教師を続けてきた原動力には一むろん生活のためという、教師自身からはあまり語られない強い前提があったのであろうが—ありきたりとも言える子どもをかわいいと思える心理が、例外なく存在したことを認めることができた。

本稿の結果は、いわば特別な教師ゆえに得られた結果なのであろうか。すなわち、自己が明らかになることを承知で直接に応じた教師であるので、特別に意欲的な教師であり、こうした特定の教師にのみ当てはまる知見なのであろうか。筆者らはそうは考えない。若干の美化がある可能性を排除できないとはいって、今現在危機にあると語った教師に代表されるように、彼らは率直に自己を語ってくれた。それゆえに、本稿の知見はこの年代の多くの教師の姿を映し出したものと考えられる。

さて、本研究は32名の教師に対する面接により、教員生活における困難とその乗り越えの実態を明らかにしようと試み、貴重な幾つかの知見を得た。しかし、さらに発展させるべき課題も残された。まず第1に、調査対象を増やすことにより、より数量化可能な資料を得ることである。本研究はこうした数量化のための貴重なカテゴリーを提出できたものと思われる。また、本研究では、男性教師と女性教師の幾つかの差異が見いだされた。こうした差異を明らかにしつつ、より信頼しうる資料を得るために男女数の均衡を図ることが必要である。さらに、管理職では特別な危機を体験するかも知れない。そのために、管理職にある教師の人数を増やすことも求められる。

第2は、資料の収集法についてである。本研究では回想法を用いた。回想法には、問題と目的の項で既に示したような長所があるが、幾つかの欠点もある。たとえば、過去のことなので忘却の影響を免れない、教師自身が意識化できないことは資料にならない、美化など意図的・無意図的な歪みがある可能性があるなどである。こうしたことから、現在危機の渦中にいる教師を対象にして、観察や面接等で継続的に追跡していく方法は実り多いと思われる。むろん横断的な方法で大量の資料を収集する可能性も考えられる。しかし、危機とその克服というきわ

めて内面的で複雑な心理的事象を扱うためには、本研究のような枠組みを模索する研究が、なお積み重ねられる必要があるかも知れない。

＜付記＞ 面接にご協力いただいた先生方に、心より謝意を表します。